

団長の独り言

「さあー初日」その2

照明、音響、舞台転換を交えての場当たりは無事終了。

今回の場当たりでは、私の想いとこだわりの、いつも以上に妥協する事なく各スタッフさんに遠慮なくお伝えした。

その私の想いを「でも、しかし、だって」とは言わず、全て受け止めてくれたスタッフの皆様に感謝しつつ、1時間の休憩後、最終仕上げとなる「ゲネプロ」(最終リハーサル)が始まった。

ゲネプロというのは、「本番」と全く同じようにおこなうのが大前提なんだけど、小屋(劇場)入りした時から、なんとなく喉の調子の悪そうな千秋ちゃんとか美佳ちゃんには、「喉」をセーブしつつやればいいからね...と伝えた。

ゲネプロで無理してしまい、本番になって本調子じゃない声になってしまうと元も子もないからね。

2人とも領いてはくれたけど、幕開きからの役者達も全力で演じているので、そんな中でセーブして演じてるのは、そりゃあーあーた、なかなか難しいのが役者つてもので、どの役者もゲネプロだからって事で力を抜いて演じる役者は誰一人としていない。

私はといえば、皆さんが熱演している姿を写真に収めるべく、ニコンの一眼レフカ

メラに300mmの望遠レンズを装着し、客席のあつちをウロウロ、こつちをウロウロしながら、シャッターを切りまくる。

それで私演じる「中沢」の出番となると、音声ガイド操作担当の美鶴さんにニコンを預け撮影班をバトンタッチして、私はタイミングを見計らい、そろーりと舞台袖に移動し、「中沢卓」を演じる。

それにしても役者やったりカメラマンやったり、演出として客席から芝居を観たりと我ながら結構忙しかったけれど、やっぱり「舞台写真」ってのは必要だからね。

そのゲネプロですが、私がバシバシシャとシャッターを切っている音にも動じず、皆さんは本番さながらの迫力ある堂々たる芝居で、とてつもなくカッコいい照明と、最高のサウンドの中、問題なく終了した。時計に目をやれば、お客様が入場いただく開場時間まで45分!(開演1時間半前)。

この時間を利用して、まずは舞台上に役者全員が並んでの記念撮影。

なぜにこんな忙しい時に写真撮影か?と言えば、今、みんなが着ているのは、エンディング時の華やいだ衣裳なのです。折角の記念撮影なのだから、華やいだ衣裳がいいでしょう!って事で、このタイミングでの撮影となる。

舞台上に椅子を用意して、結婚式の集合写真の如く、私を中心に皆が並び笑顔いっぱい「はい、ポーズ!」。

ゲネを終えて、これから本番だという緊張感の中、ホッと一息つける楽しいひと時。

この写真撮影が終わると、今度は受付スタッフさんとのささやかな交流の時間。

ふあんハウス公演の特徴のひとつとして、どなたでもお芝居を御覧いただける環境というものを、設立時から何十年間にも渡り続けていて、例えば最寄り駅から劇場までのガイドヘルプや、劇場内での誘導、音声ガイド、車椅子等のお客様への対応、点字パンフの配布等、様々なサービスに取り組ませていただいている。

ただこうしたサポートも人手がなきゃ行えないのだが、ありがたいことに劇団ふあんハウスの公演では、毎回数十名ものボランティアの方々がお越し下さる。

その中でも圧倒的に多いのが、受付スタッフとして参加して、劇団ふあんハウスのファンになり、以来、公演になると駆けつけてくださるという常連の方々だ。

寒い寒い冬の公演の時も、暑い暑い夏の公演の時も笑顔で集まって下さる!

こうした皆様がいらっしゃるからこそ、「バリアフリー観劇サポート」を行う事が出来るのだ。

その受付スタッフの皆様にご挨拶をすべく、写真撮影を終えたタイミングで客席内にお入りいただく。

初めましての方、常連の方、ふあんハウス公演のために、暑い中来て下さったのかと思うと感謝の気持ちで心が熱くなる。

初めましての方は、役者陣がずら〜と並んでいるからなのか、ちょっぴり緊張させている方もいらっしるようなので、まずは私の軽快?なトークで緊張をほぐしていただき、なんとなく皆様が笑顔になったところで、受付スタッフさん、役者陣が本番前に行く、今やすっかり恒例行事となった、アントニオ猪木さんの「1, 2, 3, ダア〜」を、天に向かってこぶしを突き上げながら大声で叫び、気持ちをひとつにさせていただく。

そして役者陣は楽屋、受付スタッフさん達は持ち場へと向かう。

お客様入場まで残り10分。今回のお芝居も緞帳幕は下りないので、お客様が入場されると、役者陣は舞台上には行けないので、開場前のわずかな時間を利用して、役者達は舞台上で動きのチェック、発声練習、ストレッチ等を行い、ギリギリまで舞台上にいる。

やがて受付リーダーと無線でやり取りをしていた舞台監督さんが、「では!開場しまーす」と叫ぶと、舞台上の役者達は一斉にいなくなり、静まり返った劇場内に、続々とお客様が入ってこられ、楽屋内では緊張感が高まるのでした。